

書評する機会を逸した三冊。
近江八景をはじめ、日本の絵画
を文化史的な視野で展望した
『藝術の国日本』は絵画と詩歌

藝術の国日本——画文交響
芳賀徹著 (角川学芸出版・6090円)

六〇年安保——メディアにあらわれたイメージ闘争
大井浩一著 (勁草書房・3360円)

戦後日本人の中国像——日本敗戦から文化大革命・日
中復交まで
馬場公彦著 (新曜社・7140円)

との響き合いを読み解きなが
ら、のびやかな文章は「画文交
響」の美しい旋律になっている。

一九六八年はともすれば情緒
的に語られているのに対し、『六
〇年安保』はその八年前の大衆
運動について冷静な分析を行っ
た。経過の「事実」解明よりも、
新聞報道の精査にもとづき、メ
ディアによって作り上げられた
イメージを究明しようとしてい
る。同時代の社会の動き、海外
の情勢にも目配りしている。

七百頁を超^べえる大著のなか
で、馬場公彦は終戦から日中国
交回復までの日本における中国
像という、途轍もない大きな課
題に挑戦した。考察の対象が総
合雑誌や論壇誌に限定されてい
るとはいえ、その主な輪郭をほ
ぼ明らかにすることができた。